

私にたつた一人だけい
る、ニンゲンの——

波津木 澄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そいつは、いつだつて隣にいた。いつも隣にいて、飽きもせずに適度な距離でそこ
にいてくれた。

目

次

私にたつた一人だけいる、ニンゲンのー

1

私にたつた一人だけいる、ニンゲンの――

そいつは、いつだつて私の隣にいた。いつも隣にいて、飽きもせずに適度な距離でそこにいてくれた。

心の、支えだつた。支えになつてくれていた。そんな奴を、私は今からどこまでも私のためにしなかならない計画に使おうとしている。

どこまでも不思議な奴だつた。いつつも一人称も内面も変わつていて、その癖根にはいつだつて変わらない優しさがあつた。

本当に、底抜けにいいやつだつた。地下に落ちそうになつた時だつて、何も考えずに手を伸ばして……そして一緒に落ちてきた。

地上にいたころから縁のある私とそいつの関係は、言葉では言い表せないようなものだ。計画をもとに表すのならば共犯者、協力者など：該当するものはあるが、どうしても的確であるとは思えない。こいつは決して人の事情に入り込みすぎず、かといつて遠くにいるわけでもない。

「ちらから手を伸ばせばすぐに届く場所。そこにいる奴だつた。

「Charaちゃんはもしかして怖気づいてるの？」

私の足が止まっていることに気が付いたのか、そいつは少し先からニヤリと大きく口を歪めながら聞いてくる。そんな訳がないだろう。そう返せば悪戯が好きだと物語るような笑顔になつて”あらあらそうですか～?”なんて煽つてくる。

いつも通り、訳の分からぬ奴だ。本当に、変わつていない。私に少しでも異変があれば誰よりも先に気付くし、気付いたことに対してもそれとなく答えを聞きに来る。直接的でないのは私の性格が原因なんだろう。どうにも、素直に大丈夫かと聞かれると無理をしやすいみたいだから。

駆け足のような形で私は追いかけて、隣に並ぶ。そうなるのが当たり前だと言わんばかりにまた歩き出すので一歩でも先に進んでやろうとすれば、何も言わずについてくる。

本当に、こいつの隣は居心地がいい。できることならずつとこのまま、なんて思つてしまふほどに。包み込むという表現は少し違う。こいつの場合は……なんというか、合させてくると言うべきだろうか。

ふわふわとして、形を掴ませないで。クツションみたいに柔らかく受け止めて、一番樂な形になる。いや、それも少し違うのか。…………ともかく、表現が難しいのだ。

いつもいつも、欲しいものを欲しい形で与えてくれる。なにか礼を尽くそうとしたら、その機会がいつの間にか作られている。望んだものに成る……と言うのが一番近い

だろうか。

本人曰く、ただ”空気を読んでいるだけ”らしいが。

……すぐ隣にいる奴のことを考え続けるのは思つていた以上に恥ずかしいな。

そう思つてそれまでの思考を止め、計画へと中心を移し替える。

計画、とは言つてもその大層なことではない。ただ少しだけ払う犠牲があるだけの、なんてことはない計画だ。

……いや、実際のところは大層な計画とは言つてもいいのだろう。だからこそ犠牲が必要になつてゐるのだから。そしてその犠牲となるのが……今、隣にいる奴なんだ。本当ならもつと小規模な、少々私が傷を負う程度で済ませるつもりだつた。けれどそれで満足しきれない私の内心に気付いていたのか、こいつが妙に煽つてくるせいで乗つてしまつた。

正直未だに少し迷いがある。こいつを犠牲にしてもいいのか、とか。こいつを犠牲にしてまで得たいほどのリターンが本当にあるのか、とか。

すでに計画を練つて、もう実行するだけの段階であるはずなのに未だに私は迷つている。

こういうのを優柔不斷というのだろう。：ケツイを固めたら直進する、普段の私とは大違ひだ。

いや、もちろん作戦も何もなしに直進するわけではないのだが、それでも実行に際して迷いはなくなっているのだ。普段の私であれば。

まだ迷つてているというのは普段と比べてケツイが弱いことの証明だ。これではいけないと頭ではわかっているが、中々身を伴わない。

「よし、着いたな」

隣から聞こえたその声にうじうじと悩み始めていた私は現実を受け止めなくてはならなくなる。

もう、時間切れなのだ。

私は隣にいる心優しいニンゲンを私の為に利用しなければならない。

私は隣にいる親愛なるニンゲンを犠牲としなくてはならない。

私は隣にいる素晴らしいニンゲンを……切り捨てなくてはならない。

それはとても難しいことで、けれどそうしなくてはいけないことだ。この計画は、きっと誰にも止めることができない。

認めよう。この先の行動は、作戦の末に得られるものは、ただの自己満足だ。

ただそれを見たいという私のエゴだ。そのエゴを叶えるために、私は、何の罪のないこいつをイケニエとして捧げようとしている。

「後悔、してないな？」

思わず、そう問い合わせてしまう。もう計画を実行に移すまで秒読みだというのに、聞かずにはいられなかつた。

それを聞くと、そいつは目を丸くして、あつけからんといつてのける。

「トーゼンでしょ！」

二カツと、爽快に笑うその姿は、きつと心から出る気持ちの表れなのだろう。一切の曇りがない。それならいいと、そう返したところであいつは行つてしまつた。これまでずっと隣で見てきたはずの、手を伸ばさなきやいけない距離だつたはずのそ
の背中は、なんとか、手を伸ばす必要すらないほど近くに見えた。